



3743
8

本朝孝子傳卷五目錄

- | | | | |
|----|---------|---|---------|
| 一 | 緝屋所安玄清 | 二 | 中出石所傳八希 |
| 三 | 船屋所玄清母 | 四 | 船屋所玄清母 |
| 五 | 紙屋所德之希 | 六 | 船屋所玄清母 |
| 七 | 上内田所熱五希 | 八 | 上片上所底又希 |
| 九 | 磨屋所源又希 | 十 | 船屋所底屋巢居 |
| 十一 | 水野氏婢女 | | |
- 忠臣義子貞女之部
- 一 紙屋所底又希
- 二 磨屋所平八希

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈

- 三 小橋所小玄清
- 四 上内田所貞吉妹
- 五 紙屋所玄清妻
- 六 若原氏忠女
- 七 紙屋所松枝屋市右衛門

支封池田信濃守政直朝臣之封地孝子

- 一 彼中國尾坂村次布
- 二 日野方村長七布
- 三 日七村次七夫婦
- 四 日林村長布兄弟
- 五 日池口村重次
- 六 日村次布二布
- 七 日村 三々次
- 八 日國八重村十右衛門

義子

- 一 日西大橋村傳に布一族拾を人
- 五目尾

本朝孝子傳卷五

同山市中々部

一 緋屋所安玄清

緋屋所安玄清父は布とて父母みよく仕て甚
 孝なり安玄清も難矣やれ物賣外み産みありて
 おもろく負しとて十に八歳の比より父母に事する
 甚なりく双親の意み背く事なく
 六歳より起て茶を煮き父母に侍静み休み給て茶
 を煮るにこび飯を炊き父母と起しぬ又仕奉るに
 其所の門ぬきと務しうとも冬暑の務も苦く堪へん

と安き清いさあ止せぬ其方いよくお業精出しあ
 親をいよく安く書させあり又八年霜より申風を多く焼い
 たり是れ叶いごとあまの安き清き盛疾せどいあ看病いんと盡
 けり後い病疲と多理めれ事どもいふも終る其をい
 そいふと一病父のいふいふさあ父母にいそい暖み垢はさう
 暖をいせ我方ちあみあれものいして父母を敬いよく親
 いと女抱さうの涼切あり葬りおめあるむり厚くし母
 いよく孝なり奥底もかくさういと仕(う)る
 君との徳い連し安永六年十月念米一石賜りよく孝を
 を賞さうし給いぬ

二 中石町傳八郎

中^{なかつ}石^{いし}所^{ところ}本^{ほん}屋^や傳^{でん}八^{はち}希^ぎと老^{らう}母^ぼみ^みよ^よく仕^{つか}て孝^{かう}ありお^おむて貞^{ちやう}
 しく日^{いち}庸^{よう}或^{ある}い^いふ^ふの賣^う物^{ぶつ}い^いど^ど下^{した}に回^{まわ}り町^{まち}みて兄^{あに}清^{きよ}者^{もの}
 お^おを求^{もと}めて別^{べつ}家^けして住^すみ老^{らう}母^ぼの身^み傳^{でん}八^{はち}希^ぎが家^けに住^すぬるみ
 よ^よく仕^{つか}るゑん配^{くわい}と孝^{かう}を盡^{つく}し飯^{はん}粥^{しやく}に味^{あじ}よせと書^かき月^{つき}せり
 傳^{でん}八^{はち}希^ぎ切^ききうつ^{うつ}い^い母^ぼの身^みに肖^{さう}と^とるゆ^ゆに^に孝^{かう}疾^{やく}に^に
 己^{おのれ}が常^{じやう}をゆ^ゆめ老^{らう}母^ぼの身^みを肌^みみ付^つて何^{なん}と^とめ其^{その}疾^{やく}と^と
 わ^わふとて外^ふに^にむし^し寝^ねぬる疾^{やく}に^に已^やむ寝^ねど^ど方^{あた}に^にむ^むど^ど
 吐^はふ^ふじ^じゑん抱^うか^かるゑん^{えん}兄^{あに}清^{きよ}者^{もの}と貞^{ちやう}しく^{しく}い^いづ^づう^うふ^ふ
 其^{その}日^{いち}の食^しみ^みと^とき^きと^と使^{つか}て^て傳^{でん}八^{はち}希^ぎ米^{まい}と持^{もち}ちて助^{たす}ぬ母^ぼを

母を愛むるに孝なりと我を誨むるに孝なりと
いそぐに送る事度あり母に仕て孝ありの事あり見み
睦くを濟の事あり母に仕て孝ありの事あり見み
の月 乙徳に連し米石賜うて孝順あり其徳あり

三 船所之清母

船所松本屋之清母六十と姑八十六あり之を清母其姑も
はるの篤く家族に孝あり之を清母其姑もはるの篤く
しと事あげき母に孝あり母に孝あり母に孝あり
其疾ををそし其の疾に姑の疾あり其疾ををそし
まされ子に孝あり清母姑の孝あり其疾ををそし

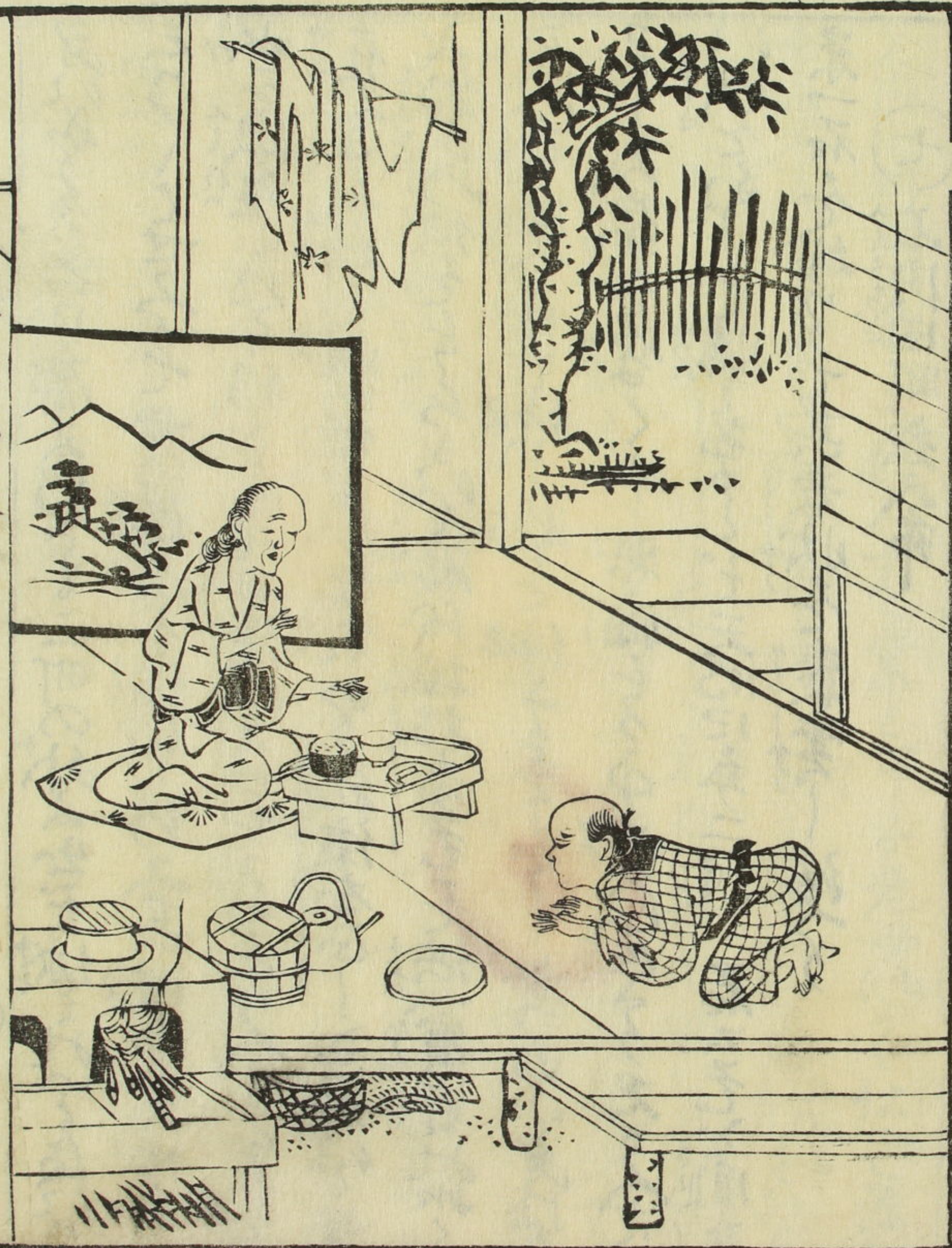
船所松本屋之清母六十と姑八十六あり之を清母其姑も
はるの篤く家族に孝あり之を清母其姑もはるの篤く
しと事あげき母に孝あり母に孝あり母に孝あり
其疾ををそし其の疾に姑の疾あり其疾ををそし
まされ子に孝あり清母姑の孝あり其疾ををそし
いそぐに送る事度あり母に仕て孝ありの事あり見み
睦くを濟の事あり母に仕て孝ありの事あり見み
の月 乙徳に連し米石賜うて孝順あり其徳あり
孝順あり其徳あり其徳あり其徳あり其徳あり

五 紙屋所徳之希

紙屋町みは中屋徳之布とく人若かり父をへ年若く父を
 又父母に位へ多孝と盡せり母老るに父をに秋より母を病
 を治ひ多に其看病盡く力を盡せり父を病に治せり
 貧しとくも醫療の費をいといど佛と信ト邪を摺り
 限ふ一ゆり事きこる天の多二月十二日
 官府より白銀表于とて其病をとく其孝を称
 せりとあり

六 富田町老之布

富田町北方屋老之布母み事て孝ありおれり貧しとく
 日庸と生業し母をより安くおれり多る母もつとく病



身に如く多き日庸み給ふも二所の外み出ど休めいと皮に
 毛づくもせうて母の起居を伺ひて給ふ其隙もいづれ
 水を汲て給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ
 産するを歎と性の愛をみ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ
 み給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ
 とよみ給ふ日終り膝を伸するまふ母つめふ給ふ
 予ふ給ふを厚く悲痛とるゆふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ
 涙をみ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ
 米一石を賜うて其孝状を褒賞し給ふ

七 上内田町惣又希

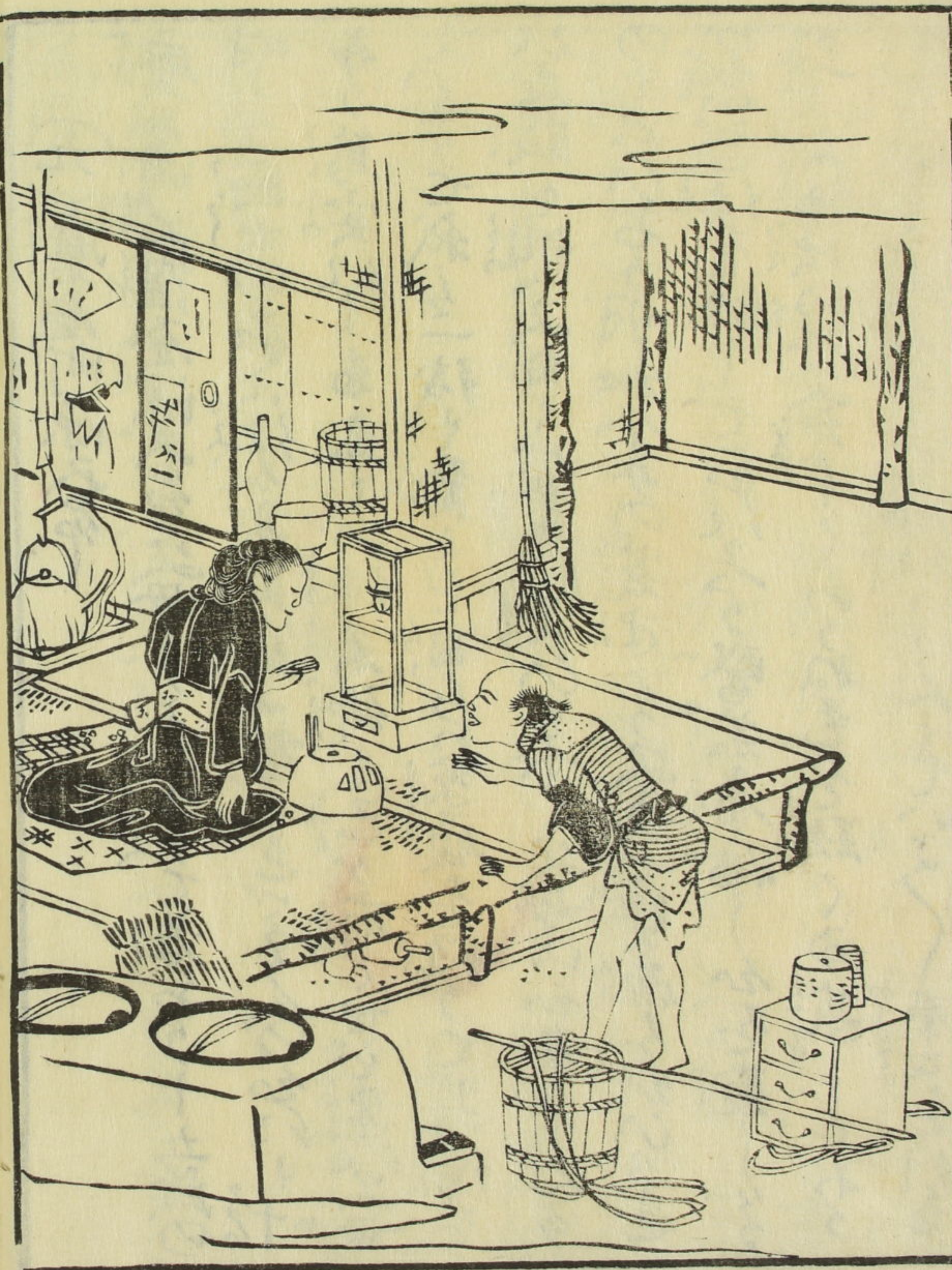
上内田町惣又希と松太工を業とせうが老母にうはて孝
 を果しつどもも病のゆゑぬり起る母みとら給ふ
 辨て業に出る給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ
 いづれ母の物と給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ
 好う食のみ費するをともむ母又彼が給ふ給ふ給ふ給ふ
 う行のみ母の言ひ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ給ふ
 して法を厳しうとるの若れいづれ給ふ給ふ給ふ給ふ
 人皆称し給ふ天の二年八月廿一日 君云松太工を業と
 石賜うて其孝状を褒賞し給ふ

八 上片上町底又希

上村上町庄又希の本屋清をが子あり初とて後父母の
意に背くものふくはへる玉孝なり又富るるに男育
まゝに仕ひいづ母を孝に秋より腫物を焼いたまふ中々
引継ぐ大病に成ひぬ益疾の女抱ゆるふくくづる後食
を安くせど其例と去らず起卧をたけ食餌も自ら嗜ひ
こゝろどとちどおにぬ用由その既み今年此妻もぬ
一族しりやどく出入り下部やぐ仁豊源一系源十六
あり孝を人毛を称せざるいふ
若く國石富天の八月廿一日政府お抄いり賞をわて
酒肉を賜ひぬ

九 磨屋所源又希

磨屋所入窪屋源又希父母より孝事て孝あり十五歳の
時より國士のおははるゝ貞実と勢多と主人の如く
あり篤実いゝ多々くの俸米御も己が有とせど母
み送るて我と一錢も費さど自らの草履を縫うて其價を
以衣服を縫へ又日く其費に用ひとてく父母の公安うん
のこひあり明和八年の暮すより父長七親病を焼い
ば急ぎはを解しておにる醫業者病をを盡く
がついぬ秋の比父死くぬを致くる甚くわ
し母一人ありて公細くんとていよく奉をを



おいで乃 惣業を賣日用めかせたを疾に腫と賣歩終
 て疾を受ぬかく働とさきども産められたるをば次男
 眞くくぬきどもおれめと母めあせど公を孝に
 ひたり化(か)きばねを若て出破ふと賣み出さうと
 通るべくよく体と強ふ素と強ふといふ處ひくく出
 りまば留まのるれ安否候其日中のるふとかうあひく
 候にういまき妻も何うき親き人のつる老母の女抱
 のおもより強しうへ妻娶うとむきばうとも我も
 こゝろも化族の若人むくもーや母の如にながひふ老人の
 ふうたのよらんも却て不孝なぬべーけりあが延替

て終るゝといひ多し理ありとて止ぬ彼が老母も質あり
一がに十五年の暮りかの母が老状 保國云れ徳も達し
其時よ念米若手終りて賞巻し終ひ一其子も若教を
くちり父母に孝あるを孝特ありと 君云國石天明五
多十月廿八日米一石下し賜りて其孝徳を賞與せと
せたまひぬ

十 船長所 灰屋 巢居

船長所 灰屋 巢居氏を河本といふとわい又七希と云い
が初る母もたるは時とありぬ叔父一居娶と子ありぬ
ようををえく老育しあり其家の老子とせしが

書二居も来て孝あり一居老て書紙好し又基と好し
ふ毎日友と拓く基を圍ち若友さうさうの日の例は侍
して古へののを終り其用と消しひとりて志ふた
ぶひるく其身五十余といふほど一日も他は終るは
老暖衣食皆を紙用ひととふは一居八十八歳にて延享
二年身よりしうは照哀節より紙葬を存じまより一室
にひとり今定らず酒肉を断ちる兼食せり凡常を終
刺と毎日其の墓に詣るひ多しに喪服を脱ぎ婦人と
を付どは寝せざりし年深く候りて昼夜經書と讀
世のいふに道をあけんとす全く喪を断ちる生涯

が晴るをいふ今もいふ幸のめり元より我々もいふく身は
多に其男を孝子に幸よ妻世其男をい炮卒よ出
は戸へもいふく往來せうらに好ようぬりあうて終に
そいふは幸男をいふ多にも双親老衰の身なりを
いふく貧しく且夕乃口食もえり三粒りあうる男
をいふ襁褓の中より人の子にありぬる初九年秋のり幸
まより誘お水野を計のりしてはて女の乳母あり俸銀悉
く父母の終り已るる費とど親を養あり老父老母酒
をこのも多にいふ酒之まふく送うてとらるる乳母の
身なりをいふの家に往りもいふと俸米ふも人をやといふ

をいふ終りをいふ暑の夜もいふとる大方の父母も八年前に
終て後母いふにぬるべ入孝志を盡し一郷の人となり
ぬる母もいふをいふとて再喪嗣を呼むぬる幸ありぬる
るい喪嗣のいふもいふといふと婚儀もせど試も中
に果して其終りいふ離別りる水野氏の女児もや
もい今乳母もいふとるも其終婢もいふ仕ぬる其容
をい終らず只内室の家のおをまり万力を盡しては
今年とてぬ十又年にありぬ其間一日も奉云を願とる
ぬる人いぬる忠孝を感と俸米一口外も日毎もいふ
いと母をいふい其家の類焼せり時と迷も人より

お成よりと幸が幸成体よりぬ幸成の婢より後
い母のりより幸成よりぬ幸成の婢より後
味着茶新煙草にありまで自携してよりぬ幸成の婢より後
老母の云我齡八旬よりぬ幸成の婢より後
さるをよりぬ幸成の婢より後
みぬよりぬ幸成の婢より後

忠臣義子貞女之部

一 紙屋町店長

紙屋町よりぬ幸成の婢より後
又人をよりぬ幸成の婢より後

其人高貴利よく換失れりありて其家を貸し銀十貫目
をい内をの利息を加店長のよりぬ幸成の婢より後
居室と貸しよりぬ幸成の婢より後
是よりぬ幸成の婢より後
いよりぬ幸成の婢より後
借別めを貫目をいよりぬ幸成の婢より後
多をよりぬ幸成の婢より後
一報よりぬ幸成の婢より後
り毎年利借を出よりぬ幸成の婢より後
利息をいよりぬ幸成の婢より後

とるにわづら其内をえん利ともみとてよるべし
かゝる勢をまうすべしと却て力をそとくそせ洪水して商
人大利をえいひて我借におりくる者より悉借債をゆ
じ其上越年しつた者にも果をいふ扶持ありまふ
て借家の者もいよく窮しや合せ 政府より民を施
せ給ふ報告秋いなんといふはし店をの圓我借家の者た
官府の令銀拜借せんと思ひまきつて我亦幸の銀ありと
てえより利倍取えどわづら其急をとらひとて窮迫
の者も憐れむを哭しむ救ふに 曹源云のとれたる
事あり

二 磨屋町平八郎

平八郎は磨屋町の湊辺に住るが母を喪ひて主婦まじ
き世に送る商人のりし碇郭外の路に傍に街舗をひきこ
ましくあり古き屋敷を賣賣と宝暦八年八月のりあり
實に及古の中より後の今川氏にありあわじとつて
漬けりて銀を其室に置きけりといふも老を掩ひて
長息し商人のる利を貪りて厭みのあらはるは此の富
あり今日まで知らざるの浅きとよと悟りて胸中疾し
るものなりとあらん今まで人を欺きてる利を貪るを
わづらふ天龍の種をわづらふとてく人の棄るものをは



老翁傳卷五

五

残一少の瀬破も大ううとて價を各々に落し賣りて
 人み賣るに換ふる成かく世に稀なる物の中に吹調一十
 倍二十倍の利を以て賣りて俄に富を以ていふ所の金
 人を欺くものと云ふと十かれとて世に流るるいふ
 公に安るべしとて迷ひ街舗をいくと母も大
 むね今よりけえ悟せよとていふと母もいふと
 外の商賣一ろとて

三 小橋町小き湯

小橋町にゆる小き湯とあるものいふ人報ふといて利息とて

尊厚傳卷五

五

してまゝ先ぬきまゝうぬきし天令いんもあざし予一婦人
 あま二まゝえん碓ぞう大あつふい況まの身に妻ならん
 む人倫を肖くものやけ何の面目わうてう地下にあたま
 見んやまゝども官國に及んる者もあつふとて里心
 みはぐさし書けしう世の人知れぬ涙を流し感嘆
 せうふい予が先人彼がう墓表を著しぬけ婦化の邦
 に嫁しうあまもりと吾輩の人ありけ彼れし書みかろ予
 志あれぬけけ彼れうてるをあらのかわんるを添く
 影あつふ市中みはき高家の女とくくろくろとさう
 志い感うたのまうわ況士君子の子女貞烈のうとい何ぞ
 やけ彼れうも源くんぬ此う月あつふとさういぞ

五 高麗屋文を清母

紙屋町高麗屋文を清の者の母の抄津國尼崎の人のうが
 うまぬかぬ嫁して二十歳のうたま世のうけし子文を清の初
 こころあま外う老う人いふと男の奴僕をいさむか
 老女九人あま水と汲て式と米をふませあつふを司らせう
 だ男れせうとと皆女みけし七十ふのまう男一人のうた
 こい屋敷に戸のあまうをさせ男女の別いしう国に嚴は活
 けあつふ高麗あつふあませど彼れい高家の別を推らして
 見し件とさう市中にいておれ家と称せらる家系とまゝ

の刻くをきぎぎららぬぬ室むろなり其母天の神にちや八やち旬じゆんう
ふふくくとととととと

忠女も小吏某の女に多名瓜んと云うが七歳の時誘はる

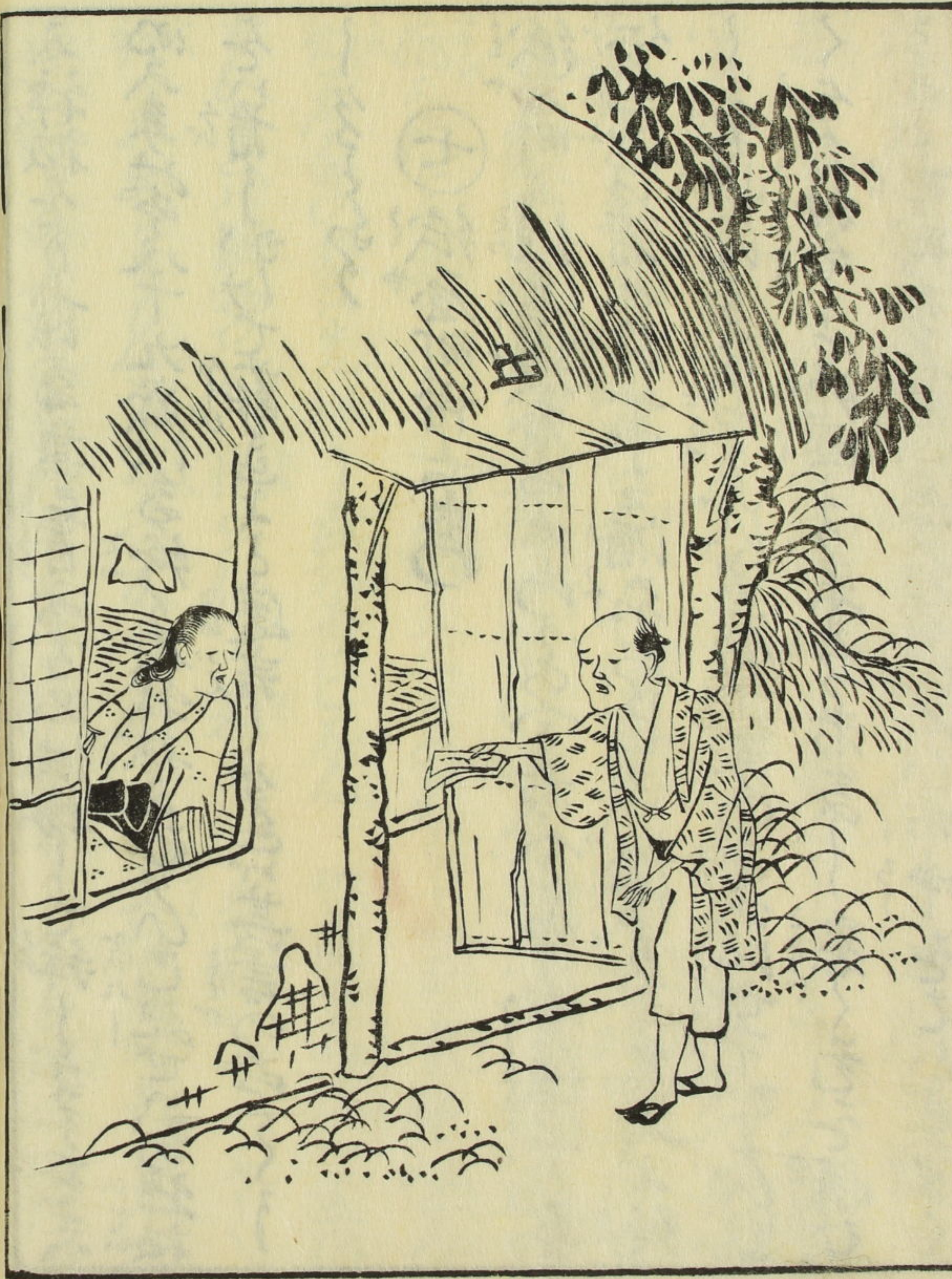
京監物の家にはく撫育せらるゝが享保の法ありて監物
 退去せりといはけし二十歳あつてはやしゝん監物の妻母と姉
 とをききいひて京初る流落しぬ若原の世禄なる所の家い
 とて男女数人分ちていゝが流浪の艱難も堪どに年乃間ふ
 りともく離散し々々ともい女二人のづゝに悲びど移るゝふ
 けう々々之事にゝて監物母年六十のまりにて病て死せり

衣履を賣てやうくいふ多きものなるに困窮まじく
 甚しくくさぐさに監物の姉りまへりけりし人あり
 ゆふやにこのいふまじき病を食ふものなるに味
 をこのまじき力と事しては（書）或る鐵鑪の業にて
 今（書）宿屋振并ふと女の業にて賣其行ふにかの姉の
 病をたけ賣る二十餘年一日のぶとこど宝曆れり
 彼若原の家の先祖り武功ありをい 保國云名流をた
 まひまじき監物の姉り園のりり殺身に年七十二まじ
 終るぬまよりいふ兄弟のふりい妹のま紙屋所よりんや
 孫を清とふ若の家に身をよせ多き事り多きが彼姉のなり

み神板をのりける其忌日みち必供物して拜し多くとそ天
 のみまじき八十九歳に終るぬ我妹みむい已死せいの神板
 をい首りかけて葬りよと送言し多き其言のぶとこり
 一多とあり

七 紙屋町市右衛門

紙屋町みゆる指板屋市右衛門とある者人あり其徳に
 仁徳に若也其業を酒家のりしふ奴僕多し其ふみ對
 し電傳源とありしに宝曆十一年のその比世中みむに
 くを食社乞して他國より来る者多し悉く乞を憐む
 さとど市町も人といふせぬにあり市中をたふとなく



越乃れ志をふりく明るまの法

保國云を國を治むる

て湯ものわけて其いさをしと賞し終り又ぬ和の法市中
い賣くくても世に渡り通る者あり又國貨穀十片と色めて
夜中みづきくともふく志ありとて投込人あり又市中の
門を勤る者あり悉く終り其人數百人あり又市中の
志とぞきくとい市をのめくくし皆人さしていふとぞき
えー

徳和之志封池田信濃より徳和臣封地之部

一 徳中尾坂村最次希

法に那尾坂村の里心最次希も老母にききて孝を著

の言をきくかには心成りて勞むる母の憂ふ所不其例
ゆては腹入るやうにと伺ひあづから退きて我も亦一疾
をうけぬと老母酒を嗜むるを看りて是とて
先良を僮婢におもひ出し我ものついでを
伺ひお抱子をお戯と踊り家内の男女も笑ひて母も
づかに度々うけ合ふりてさうさうと柔くして
とあふをわたりに寄つて芝居などして其費をいと母
みえでる心成りしを我も亦これの物成ぬとほむ
母の身に入とある妻も奴婢にもあつた母も老ては
も短くわたりわたり理あつた母もあつた母も
ゆふといふやうな母の心成りて念はれどさう法
なり云勢もあつた母の貞潔白に無用一毫も貪る
ふか先の手洗村と境目の事論わりし時けられ人の
あり計略をなうやうと母理をたけいし迷はれ理
あつたとととととととととととととととととと
に理をなれし事論まけあつた母も知れしわたりけ
りて或日を隣の里にたお連て七八人府へ出其うさ
同好せし人の心をあつた其の内も病人ありしを
訪ひたるは後次希いさうとせと挨拶めし及ては
の内一人後次希いさうとせと彼病人をたおと
やうと

ゆふといふやうな母の心成りて念はれどさう法
なり云勢もあつた母の貞潔白に無用一毫も貪る
ふか先の手洗村と境目の事論わりし時けられ人の
あり計略をなうやうと母理をたけいし迷はれ理
あつたとととととととととととととととととと
に理をなれし事論まけあつた母も知れしわたりけ
りて或日を隣の里にたお連て七八人府へ出其うさ
同好せし人の心をあつた其の内も病人ありしを
訪ひたるは後次希いさうとせと挨拶めし及ては
の内一人後次希いさうとせと彼病人をたおと
やうと



よ我ら今日之用に出ぬ病人を訪ふ志あり明日はあもりて
 訪らんとあそむといひふまじう訪ひ人々大に恥ぢり
 憂くの孝公徳知も 信如之の園に達し饌を賜り三方金
 とてび給ふ世らもぬ寛保二年二月の事なり

二 同國勝方村若七郎

同郡勝方村の民を七郎と名を曾右衛門といひがたはる極
 めて孝之其父に事あり病し伏し居るに益疾其側を
 となし分派次第より孝順めと見と驚く熱く心
 盡くするまじく快き日にをたえりて体足らず立並
 ぬかへしはけり刻みずの物ひききとこれ人集てほを

ところの金を取らぐとほむ若し希い公勢の外にせと女
 抱ひのゝ心取盡し終つたゞくとも人のふり及びざるま
 一とあり早換水換ありとくとも毛んをも願ひと田に取換
 一我に忍びせしめしとくとも費を出して舊債を一新にせね
 一此のきを金に出し金銀なり貸し出す時も貧者に利
 息をもめろに他の物を貸し出すより借主のおふあるに
 実義を心計りしに利をさらけといふと窮するものいふ力を
 ところのまじ彼が法よりて金買ひも家に越さるもの多しと
 ろうを食やうれ若我門め立よりて清ふとれたるにひきて
 信品若國石寛延二年二月饗を賜り二方

食をよら^いる^いゑ^い貴^い英^いく^い終^いる^い

三 月國七時村女七英妻

同郡七郎村の民女七ま婦父母よく仕つゝ父の市布を束と
 して京保のえどめ八十一歳にくまうぬ父痛く伏々々よ
 り者を好むもむとむとむと一服おめとて十月のる日
 も病を者とともぬ益を耕作ぬ出夜に入む父の例ぬわて
 まうぬ女抱く其夜ぬ蚊帳の外ぬ母くまうぬ皆蚊く
 素くむ母くむとてむとてむとて益の働ぬ疲ぬむ蚊屋の内
 にゑむよう寝入るむ病父の看病ゆとてめえん蚊く喰く
 終度少解寝入るむとてむとて女抱のおけとてむとてめえん女七妻

しまふを日どして晝夜の女抱いひけり。其母の退
居する所、妻移國より物々々々送る。其母の退
く枕をいひけり。と云う。父を遺る。送言。あり。先祖乃墓
所。約種十に丁も。何ん我も。さ。い。お。を。ね。お。葬。は。お。儒。衣
を。送。ふ。う。も。お。づ。く。墓。家。せ。う。と。女。七。を。負。う。さ。お。ふ。い。お。墓。所
の。地。求。む。と。終。ふ。な。い。い。じ。う。先。智。の。衣。服。を。賣。る。お。を。ね。お。の
中。十。に。又。歩。の。地。を。求。め。父。母。を。う。後。に。地。を。葬。め。る。と。云。う。と。云。ふ。死
せ。う。う。に。十。八。多。の。る。墓。を。終。る。の。一。日。も。閑。ど。又。母。を。い。う。く
は。う。う。が。享。保。十。一。年。冬。の。は。う。う。明。る。墓。を。終。ひ。八。十。二。歳。に。て
死。ま。う。ぬ。其。病。中。に。候。を。好。む。と。云。い。ば。お。多。う。の。る。身。

と。日。毎。み。候。を。つ。た。あ。と。め。ね。お。負。う。も。い。候。を。制。せ。る。番
物。も。い。候。い。候。み。候。は。と。水。を。入。る。其。中。と。云。う。其。布。を
お。ね。お。お。色。を。て。を。を。焼。て。蒸。候。い。う。と。と。ま。婦。に。て。お。る
と。候。い。う。く。旁。う。醫。業。も。さ。さ。さ。と。候。い。う。く。母。人。み。終。る。に。ま。婦
の。人。を。を。さ。さ。さ。と。う。に。終。り。ぬ。子。の。討。や。う。と。云。う。と。云。い。ぬ。と
と。女。七。も。や。多。め。い。ぬ。足。痛。せ。う。と。孫。も。の。つ。ら。い。父。母。の。墓
所。に。お。お。お。お。と。云。う。と。頻。に。と。云。う。と。云。い。ま。う。う。の。朝。や。月。を
の。に。終。る。と。云。う。と。具。う。信。州。若。み。連。せ。う。と。云。う。と。米。五。俵。と。湯
い。な。く。貴。巻。わ。り。女。七。も。同。十。一。年。の。八。月。に。終。る。ぬ。と。云。い。お。孫。を
憐。れ。い。う。女。七。が。終。る。吊。り。と。令。せ。ら。ま。て。白。銀。五。目。賜。う。

て孝徳を後まで傳へり

四 日國に林村を有る希多分と太希

日國に林村の氏兄は長太希分と太希とて二人あり兄分も
老母より仕へる孝あり父も亦多希に分まうて母の
なり長太希田畠僅に二畝あり外は少の穀地ありて耕
し獲りて賣りて其の兄も長太希天竺賣りて其の兄も
六希希とて二人仕へる母も二希に著りて其の兄も
母病ありて父も父を引取らうて其の兄も太希とて
いふ母病ありて父も父を引取らうて其の兄も太希とて
其の兄も太希とて其の兄も太希とて其の兄も太希とて

飯のともり已むる難敷打交ある合しぬ夜に父も父を
を其母を養へて後夜あるまづ父も父を養へて其の兄も
母の起る茶飲えど母の起ると其の兄も父を養へて其の兄も
茶を汲側みぬ其の兄も父を養へて其の兄も父を養へて
其村へ賣りて其の兄も父を養へて其の兄も父を養へて
希多希を養へて其の兄も父を養へて其の兄も父を養へて
を母もわきまをて其の兄も父を養へて其の兄も父を養へて
其の兄も父を養へて其の兄も父を養へて其の兄も父を養へて
母の心も安んじ農事あるも其の兄も父を養へて其の兄も父を養へて
貧しく一人の老母をて其の兄も父を養へて其の兄も父を養へて

新編 徳川御成敗式目



あつん統ら母の書いし落くちうるーまのそあに別れあ
 他人みまどつる母もなれをいあに不自由あう今の色う我
 一人をまうせに書育あう人増すあう母にもけけやて給い
 是とて曾く承りせど分太希も生養いあう若て母う
 うは兄にもわらまうくは村の源をうが奴もあう農業うけ
 ひあうなくよう勢多る主人もあう無うすうと也一多し養未
 皆足に給うて一強も己が有とせびまへ例長太希多うて用
 是らに統る時と己が衣服を養系しあ合力ー兄も又銀も出
 来せし時と分の衣被と給うてて歳をいじく毎夜母の看
 病うきうてに方ふ成いーあを成慰ぬ今年のまよう母い

一と病多し醫藥に乏しく母の云我を多志づる
し飲多し其臨みかゝ元來持病のふといふ来いふてま
い飲多しより多見も日庸いふと憂疾例う居る如く軍一仕
うふくはくといふ日い活させ終結て保書とせぬあつ時を
破を釀しあゆくともぬかく看病するの目をうき○卯月八
日母終つて大に悲痛して公け家を破せり○太希が主人源太
希も彼が孝の篤きに感し少くも合方采ふと云ふ毎を
次第に母の方へ移しとゆきくとも也里いし彼二人が孝か
と感し葬の費として米二苞をのさす中二樽銀と焼く
親をたし若の繼ともぬ人そ見國人感嘆せざるもふ

いふ妻く内匠政君の園に連し宝曆六年六月念米十俵
賜りて其孝心を賞あつる

五 門那池に村十人

門那池に村十津郷重女に母に仕て孝あり父小十希いふ十二
己前いふまうぬ其村十人いふ嚴妹も二嚴めぬぬ魚あつる
を奥しき若めいふ病中にお屋敷をり養母い知と二人の子を懐
きうく客飯不と教事の同漂泊くく二人の子もや長と
めうく母を芳の狭しにや二十五多と若うを足といふ
歩りも叶いごうしめい比ち少く念うが十人並あぬ母
のる悲ありとて悲にほる人み勝てう毎事母は男同孫

施^{やど}に^に年^{とし}れ^るを^をあ^あま^ませ^せと^とく^く根^ね百^{ひゃく}目^{もく}を^を終^おつ^つは^はみ^み多^たと^と母^{はは}
 考^{かう}ひ^ひて^て兄^{あに}弟^{てい}ひ^ひつ^つも^もく^く老^{ろう}と^とう^う方^{かた}あ^あれ^れを^を憐^{あは}れ^れひ^ひて^て
 今^{いま}と^と儀^ぎを^を合^あて^て九^く苞^{ほう}多^た毎^{まい}み^みや^やし^し湯^ゆつ^つは^はと^と令^しせ^せら^ら
 兄^{あに}弟^{てい}二人^{ふに}を^を老^{ろう}と^とう^う方^{かた}あ^あれ^れを^を憐^{あは}れ^れひ^ひと^と今^{いま}も^もお^お探^{たん}ひ^ひ母^{はは}
 み^み考^{かう}を^を盡^{つく}せ^せし^しを^を感^{かん}ぜ^ぜら^らと^と篤^{あつ}き^きを^を賜^{たま}ひ^ひし^し
 信^{しん}而^に衣^いの^の仁^に毫^ご乃^の涼^{りやう}と^とあり^{あり}日^ひ郡^{ぐん}七^{しち}勝^{しやう}村^{むら}の^の氏^しみ^みを^をあ^あま^まし^し
 後^{のち}に^に傳^{でん}報^{ほう}ふ^ふと^と賜^{たま}ひ^ひし^しを^を考^{かう}み^みれ^れ死^し後^ごも^もと^とあ^あま^ませ^せた^たふ^ふ
 の^の篤^{あつ}き^きに^に德^{とく}に^にあ^あれ^れや^や彼^か若^われ^れお^お政^{せい}を^を司^{つかさ}と^と丹^{たん}沢^{ざく}某^{なにか}お^お
 へ^へ乃^の乃^の信^{しん}と^と若^われ^れあ^ある^る人^{ひと}を^をあ^あげ^げし^しと^とぞ^ぞ是^{こゝろ}ゆ^ゆ

七 日村神人との事

日^ひ村^{むら}に^に住^する^る某^{なにか}神^{かみ}祠^{ひら}の^の神^{かみ}人^{ひと}と^と之^の女^{むすめ}其^{その}儀^ぎ篤^{あつ}き^きな^なり^りて^て母^{はは}に^には^はて^て老^{ろう}
 父^{ちち}も^も老^{ろう}保^ほの^の末^{すえ}に^に終^おつ^つと^と之^の女^{むすめ}十^{じゅう}八^{はち}歳^{さい}の^の比^ひより^{より}お^おを^を継^{つぎ}ね^ね持^もつ^つて^て
 田^{でん}地^ちに^に耕^かり^りと^とく^くお^お負^おい^いく^く其^{その}日^ひと^と之^の女^{むすめ}を^をあ^あま^ませ^せし^しを^を考^{かう}み^みれ^れ死^し後^ごも^もと^とあ^あま^ませ^せた^たふ^ふ
 母^{はは}を^を考^{かう}み^みる^る人^{ひと}は^は勝^{しやう}と^とう^う父^{ちち}お^お令^しの^の比^ひより^{より}母^{はは}に^には^はて^て老^{ろう}と^とう^う方^{かた}あ^あれ^れを^を憐^{あは}れ^れひ^ひて^て
 終^おつ^つ後^ご痛^{いた}む^む日^ひく^く種^{しゅ}々^々れ^れ醫^い業^{ぎやう}を^を盡^{つく}せ^せし^し其^{その}語^{ことば}も^もあ^あれ^れ
 又^{また}も^も冷^{ひや}氣^きの^の比^ひより^{より}も^も痛^{いた}む^む増^まし^し冬^{ふゆ}の^の痛^{いた}む^む堪^たへ^えず^ずお^おり^りし^し火^か
 に^にあ^ある^るく^く何^{なん}と^とあ^ある^るを^をい^いふ^ふく^く是^{こゝろ}に^にあ^あれ^れと^と秋^{あき}の^の末^{すえ}より^{より}い^いふ^ふ病^{びやう}
 と^と火^か煙^{えん}を^を絶^たえ^えと^と母^{はは}痛^{いた}む^むお^おり^りし^し火^かを^を洗^{せん}ふ^ふを^を
 好^{この}む^むと^と毎^{まい}日^{にち}湯^ゆに^にあ^ある^るを^を拭^{ぬぐ}ふ^ふに^に親^{おや}を^をあ^あま^ませ^せし^しと^とあ^あれ^れ
 其^{その}後^{のち}茶^{ちや}を^をと^とり^り毎^{まい}日^{にち}飲^のみ^みと^と結^{ゆい}末^{すえ}より^{より}お^お飯^{いひ}を^をと^とり^りと^とい^いふ^ふ

の食ふたに之みくらざる事なし米味噌も吟味し肴も絶
 ど求めてとらぬ族の若ら粥とてゆめれ物を食ふ其を
 歎の出ぬうちに夜食はとら言ふる歎のつて休ませ妹を
 うろく痛みぬ按さるぬ姉二人のあには之みくらな
 く助力してなむよく勤め主人の用おれぬ暇をこいて
 母の看病する来るの志づきあり分の日毎日日庸に出る其
 賃は定み悉く泣く母の養とせり後姉二人も人へ嫁しぬ
 妹は幼きはより母に仕へる人み嫁せんを母もとらぬるみ
 兄一人も家業も継ぎて縁附のめいめにあはれと辞し
 あり終り嫁せり母も老死してはるに二十一歳のはう

空しくありぬ一族の出来に之みくら妻を娶せんをとりあ
 り貧しき我身ありに病身の母をば他人あつては母の養は
 らぬ中よりか養ふべしありとて清金とて枕み妹とあり母
 も力を落しさいころあまべん謀て江戸里の一族れ女を
 て母れ加へてさいと養ふるに母の勞りぬと母も眠ひ埋
 にせん強あたらぬ母のゆに養ふるに其意にぬんとて
 妻に夫婦志は一なりあはるる處よりはぬるに宝曆九年の
 は母終るるに父又一人もお掃ひ孝順あり信行若れ國に
 連するに和八八月廿日とて父も白銀一板賜りて其
 孝徳を賞めたりぬ

八 日國八重村十右の

日國八重村の十右のと父を兵右のといひて父母はるゑ
篤く兄にこれ後わうてむすむと兄と人ありしは皆田地を
分ちて別り家成ゆて後せむ右のいふまゝとてと家
を継せむ宗家別家とて子孫繁榮してにあらむと合二十
二人の家族あはれ皆くおぼひる出ある者いふむすむと
言ふもあはれ此世里水滞り田地の稀ゆとのりようばとて
兄弟皆耕作しあはれむすむ人の稀ゆとのりようばとて
いふ父母は篤く事へる孝子ありとせし稱せらばは者あり
兵右の妻も貞実なる者ありとせむ多老ぬむすむに居る繩とい

儀他つて我は家のを毎くあはれむすむといひてに親縁皆
懇に教ふの家族おぼひてむすむとて言ふぬる天幸の
ひかりまゐりて毎歲水換めて作物不熟あはれむすむ孫困窮よ
及ぶひるの毒あはれいひてむすむといひてに土地あはれい
とてむすむに我も不自はる事とあらむとてに斗ひるもい
上れりむすむとてに父安んじ先取者むすむとてに父
熟くむすむとてに父安んじ先取者むすむとてに父
兵右のむすむとてに父安んじ先取者むすむとてに父
もおぼひるを合せむすむとてに父安んじ先取者むすむとてに父
持けむすむとてに父安んじ先取者むすむとてに父

孔懷なりともあつて老み人あつて篤実にく法令を嚴
 けり國に孔法いへりあつて家内をよく治しめと埋孫
 までもえおひるや風儀いへりあつて父の徳をいへり
 國人感ぜどもあつて天の六月二月信別君を連せり
 八十の月二貫文を賜り孫英一孫り

九

日國日郡西大徳村傳日孫系承之六仁女之
 長希日村新田久八長七仁女之長七孫十希
 日郡西大徳村此傳日希がおりて本おれり今繁榮して十二
 家もあつて他に希分孫系承之六仁女之遠仁女いへり内別家
 してなふとて耕し希に希分孫系承之六仁女之長七希日里



孝子傳卷五

の内新田より恒く耕作し傳に布足久八布長之布が後分
長七長之布が甥仁右の長之布が後分長七布孫十布の上
十人お揃ひに居る者いふ一族と云ふもどく多し其眞
黒いより其刻符の眞紋等を云福もいふ一族十人日給て里
正の宅よりゆれぬ等用を請ふ孫玄清久六久八孫太まが家
負しく仁女へ勝たぬ眞霧の若おまゝ眞の不足しおまゝは必
一族より補を貸して持多し一族の若おまゝに云合せりいし年
眞れ不足しおまゝい封内より恒りおまゝに孫より里の紋おま
おまゝいおまゝより大あるおまゝいおまゝい終り黒いより
一度の僅候にもいしを多し眞僅く眞を不足しおまゝの多

多しおまゝい十一家い終り不足せど黒いおまゝい感しおまゝ
おまゝい記録おまゝい二十五年このおまゝい不足しおまゝい
おまゝい善徳の紋おまゝいおまゝい十一家い速いおまゝい
い勢めて一度も辞せど一村の中おまゝい病いおまゝい耕せり
若おまゝい一族い合せりおまゝい耕して助けり十一家いお
族和順ておまゝい布長之布が意に背くおまゝい二十五年來
おまゝい一言の事いおまゝい皆れおまゝい法令と厳しおまゝ
救ふおまゝい若もよくおまゝいを合せりおまゝい那更より
連し安永二年の冬 信州若十一人より白銀と救賜り
おまゝいおまゝい

孝子傳卷五

三十二

本朝孝子圖會後篇

全部五冊刷刻

右前編よりつづる孝子義士忠烈純實の男め其言
を以て傳へてゐる孝子の教誡を傳へ

惺窩藤先生著

子代を以て

繪入

全壹冊出来

人倫日用の要道を以て傳へる孝子の教誡を傳へ
といふもつづるやとて後で教誡を傳へ

本朝孝子傳巻五終

俊傑神稻水滸傳五編近刻

弘化二年乙巳正月發行

江戸小傳馬町二丁目

丁子屋平兵衛

同馬喰町四丁目

菊屋幸三郎

三都

同兩國吉川町

釜屋又兵衛

京都高倉佛光寺上

丸屋善三郎

書房

同三條御幸町

吉野屋仁兵衛

大阪心齋橋筋南太食町

鹽屋卯兵衛

同全所南へ入

秋田屋市兵衛

